

あとがき

超音波教育の未来

小児診療において、エコーは聴診器やペンライト、耳鏡に並ぶ診療道具の1つとなっていました。

浅井塾所属の先生方から「エコーに対するハードルが下がった」「エコーを気軽に使ようになった」という声が多く寄せられるようになってきました。

忙しい臨床現場では、エコーの腕に自信がないということで、短時間で結果が出るCTやX線に頼りがちになる方々が結構いるかもしれません。

低侵襲性（被曝をさせない）の検査と早期診断。このバランス感覚を保持することはかなり難しいことと思われます。しかし、「エコートechnique」を身につければ、この難題も解決されることになるでしょう。

「エコーに対するハードルが下がった」と実感し、日々の診療でCTやX線を施行する前に積極的にエコーをあて、その有用性を後輩や同僚に広めてくれている塾生がいることは、たいへん喜ばしいことです。

浅井塾では「エコーで診療のフィードバックを得る」ということを大義にしています。エコーは事前に行う病歴聴取・身体診察（臨床推論）の答え合わせ、という位置づけで行い、検査中のコミュニケーション、追加の病歴聴取も欠かさず行います。結果、検査前に疑っていた鑑別疾患のスクリーニングに加え、その場で他の臓器をみることもできて見落としが減り、かつ、症状・病歴と画像所見を結びつけることができます。また、外科的な介入が必要になった場合は、可能な限り手術にも立ち会うようにしています。

このような教えが「エコーで全身をみるようになった」「エコーをやっていなければ遭遇しなかった、あるいは勉強しなかった疾患に触れることができ、知識の幅が深まった」「解剖に対する理解が深まった」という声につながっているのでしょうか。

波及効果なのでしょうか、「外科的知識も身に付き、外科医ともディスカッションできるようになった」「エコーの実施のために検査室に頻繁に出入りし、検査技師とコミュニケーションをとるうちに、いろいろと教えてもらえるようになった」という感想もありました。

自分自身の能力の向上はもちろん、他科の医師や他職種のスタッフとの連携も深まり、「チーム医療」の推進にもつながると考えます。

われわれが推進している「小児臨床超音波」の発展に、人材育成は欠かせません。

本書を皮切りに、「浅井塾」はこれからもさらなる活動を行ってまいります。

最後に、そう遠からず、CTやMRIのように遠隔診断する時代が必ずやってきます。

そのパイオニアとして鋭意取り組んでいくことをお伝えし、「あとがき」とさせていただきます。

2021年9月

浅井 宣美